

十 ある死

父は二十数年来、月に一度、病院に出かけて定期検診を受ける生活をしてきた。その前夜は必ず風呂をたて、ゆつくりと湯につかり、早めに床についた。次の朝、六時ごろに起きだして背広に着かえ、最寄りの小学校まで一キロ余りの道のりを歩く。そこは大通りの四つ角に面しているからタクシーがひろいやすい。

父が背広に着かえるのは、二十数年来この病院がいぐらいしかなかったし、タクシーに乗る機会もこのときぐらいだった。とにかく遠出をしない人だった。

◆趣味室

その日も、母が早くから朝食の準備をしていた。両親の家の台所から、コトコトという物音が聞こえていた。父はいつものように起きだしたようだ。妻はそそくさと食事をすませ、車のキーを鍵棚からとり、エンジンを温めるために一足先に飛び出した。

その日に限って、父は妻に車で小学校前まで送ってもらうことになっていた。近隣の道路は下水道工事でズタズタになっていたし、雪が降ったなごりで通行可能な道までぬかるんでいた。

その時になってもまだ、わたしは父の病院行きに不安を感じていた。インフルエンザが全国的に流行っていたので「きつと病院で風邪をもらってくるに違いない」という不安があったからだ。だが、口には出さなかった。

父は昭和天皇と同一年だった。すでに九十一歳と五カ月になっていたし、決めたことや決まりごとを守りたい性格だった。第一、父は無二の病院好きで、医者や薬をとっても信頼していた。

父が玄関を出た。「とめようか」それとも「好きにさせておこうか」と思いつつ父を見送った。いつものように足元に注意しながら、少し前かがみに歩いていた。八十四歳の母が一年あまり前に大腿骨を折ってから、父はとりわけ用心深く歩いていた。

十分もしないうちに妻が息を切らせながら居間に飛び込んできた。そして押入れを開け、救急箱を取り出し、何かをゴソゴソ探しはじめた。「今年はじめて取り出すマスク……」を父につけて行かせようと考えたらしい。

さらに十分ほどして妻は戻ってきた。そして、とうとうに「仮設小屋は予定のところ建ててもらってよろしいね」と聞く。わけを聞くと、建設工事の事務所用の仮設小屋を建てる業者が来たという。ちょうどわが家では増築工事が始まっていた。それまでの妻の人形工房が手狭になっていたので

新たな工房と人形を飾る部屋を作りつつあった。

父は、妻がマスクをとりに戻っている間、小学校前で待っていた。その間に父に道を尋ねる人がいた。「それなら嫁が来ますから……」と父は応え、その男は「ラッキー、今日は朝から縁起がいい……」と応じながら二人は妻を待ち、妻のナビゲーシオンでトラックを運転してきたわけだ。

昼前に父は病院から元気に帰ってきた。だが、不安は的中した。その日から数日後に発熱し、三日ほど熱がつづいた。その後、朝方には平熱にもどるようになったが顔色はさえなかった。父も「歳じやなあ。体力がもどらない」と平熱になっても元気がもどらない体をなげいていた。あれほど楽しみにしていた増築工事の進みぐあいを見に出ることもなくなった。

「寝てばかりいてはいけませんよ」と母や妻は父を上げまし、せめて居間のコタツにでも入ってテレビでも見るようにすすめていた。

「どうもようすが違います」と心配する妻の言葉にせかさされ、わたしは父を見舞った。父の部屋をのぞいてみると、父はむこうを向いて眠っているように見えた。顔色は悪いが医者からもらった薬はきちんと飲んでいようだ。

「どなたはんですか」と、父は首をこちらにひねりながら、のぞきこんでいるわたしに向かって言った。目に正気がない。ドキッとしているわたしに、「その内に……」きつとこういふことを言いだすに違いない、と付け加えた。父の冗談癖はまだ健在だ。

その日、一九九三年二月二十三日、わたしたちは両親の家で夕食をとった。いつもは、妻が用意した食事を両親の分だけ隣に運んでいたが、あるいは週に一、二度は両親にわたしたちの家に移動してもらって四人でとっていたが、その日にかぎって鉄板焼きの鍋をわたしがもって両親の家に移動した。父の発熱以来始めて四人でとる食事だった。

父はよく食べた。たっぷり食べた後で、妻が前もって用意していた「おじや」が残っていたことに気づきスプーンで食べ始めた。「お父さん、無理しなくてもいいですからね」と妻は注意したが、父はパクパクと口に運んだ。まるで生きるためには食べなければいけない、と自分自身に言い聞かせているようだった。

その夜半、父は幻覚症状におそわれた。母がゴソゴソいう物音に目をさまし隣の部屋をのぞいてみると、父は起き出して「のどが乾いた」といって薬箱をひっくりかえし、薬を部屋の中に拡げているという。父はトローチを探していたというが、それはあやしい。正気であれば、茶の間まで出ればすむことだがそれをしていない。

翌二十四日の朝、父の顔色はあいかかわらずさえなかった。だが、父は起き出して顔を洗い、居間のコタツに足を突っ込んで横になり、テレビを見ていた。いつもの通りに食事をしたという。その日は、父が楽しみにしていたテレビ番組「暴れん坊將軍」のある日だった。

夜、妻が二人分の夕食を運んで行った。「お父さん、お食事ですよ」と声をかけても反応が鈍かつ

たという。「小夜子さん、甘えているのよ。ほっときなさい」と母は父が甘えているものと思ったよ
うだ。

それから十五時間後に、父はこの世を去った。